

イチゴでハダニ類の発生が多くなっています。
施設内をよく観察し、ハダニ類が発生している場合は、
速やかに防除を実施してください。

ハダニ類（写真 1、2）は葉裏に多く寄生し、高温・乾燥条件により増殖が速まります。被害が進むと葉裏が褐変するほか、株のわい化や花房の発生が悪くなる等、収量に影響を及ぼします。ハダニ類は増殖が速いので、ルーペ等でイチゴの葉裏をよく観察し、早期発見・対策をとることが重要です。

[現在の発生状況]

12月中旬現在、イチゴにおけるハダニ類の寄生葉率（本年値 27.3%、平年値 14.5%）は平年より高く、被害葉率（本年値 25.9%、平年値 11.7%）は平年よりやや高い～高い（図 1、2）。

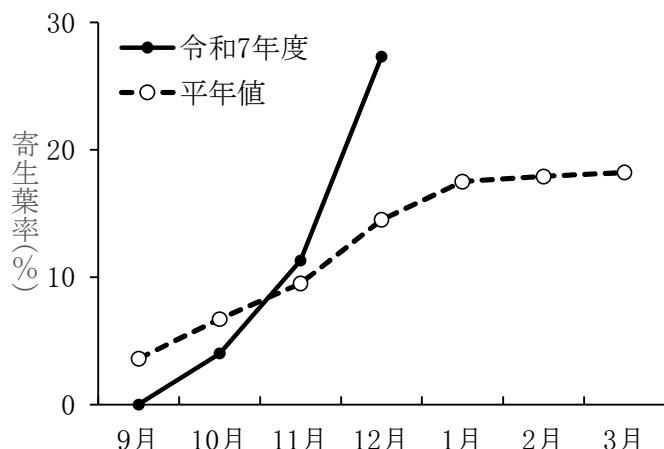


図 1 寄生葉率の推移

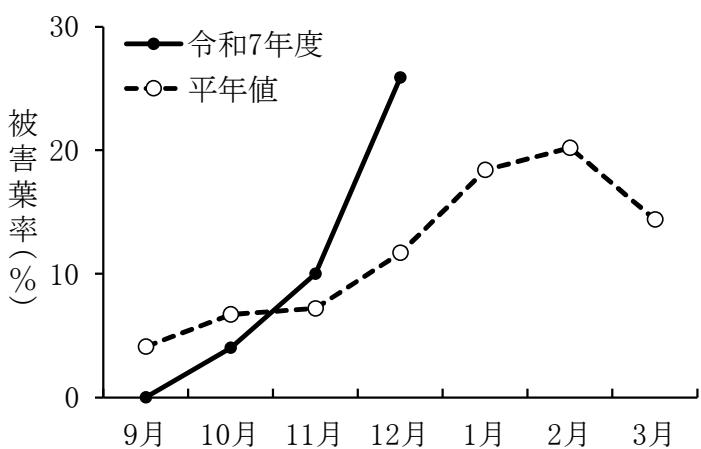


図 2 被害葉率の推移

[防除対策]

- ① ハダニ類は増殖が速く、多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 天敵導入圃場では、ハダニ類や天敵の生息状況等をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼を検討する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、次ページの表を参考に IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。



写真1 ナミハダニ雌成虫(体長0.6mm位)



写真2 ナミハダニ幼虫(体長0.2mm位)

表 イチゴのハダニ類に登録がある主な散布剤

(令和7年12月16日現在)

IRACコード ¹⁾	薬剤名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	ミツバチに対する影響目安 ²⁾
6	アファーム乳剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内	2日
6	コロマイト水和剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内	1日
20B	カネマイトフロアブル	1000～1500倍	収穫前日まで	1回	乾けば影響なし
20D	マイトコーネフロアブル	1000倍	収穫前日まで	2回以内	1日
25A	スターマイトフロアブル	2000倍	収穫前日まで	2回以内	1日
30	グレーシア乳剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内	1日
33	ダニオーテフロアブル ³⁾	2000倍	収穫前日まで	2回以内	乾けば影響なし
-	サンヨール	500倍	収穫前日まで	6回以内	乾けば影響なし
-	粘着くん液剤	100倍	収穫前日まで	-	1日

1) 殺虫剤抵抗性対策委員会(IRAC)により、殺虫剤の有効成分を作用機構により分類し、コード化したもの。

2) 散布後、ミツバチを放飼できるまでの日数。各農薬メーカーに確認し取りまとめたもの(令和7年12月現在)。

3) ダニオーテフロアブルは銅を含む製剤との混用及び近接散布で防除効果が低下するおそれがあるため、使用の際は次の事項に注意する。

- ・銅剤との混用を避ける。
- ・本剤を散布した後に銅剤を使用する場合は10日以上散布間隔を空ける。
- ・銅剤を散布した後は本剤の使用をさける。

[注意事項]

- ・農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載されている使用基準や、注意事項を必ず確認のうえ使用する。